

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	忍耐論 : その倫理的な位置
Author(s)	近藤, 良樹
Citation	HABITUS , 20 : 51 - 66
Issue Date	2016-03-18
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/39835">10.15027/39835</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039835">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039835</a>
Right	
Relation	



# 忍耐論

## —その倫理的な位置—

近 藤 良 樹

(広島大学名誉教授)

### 1. 節制の物足らなさ

(食の節制は、まずいものの摂取には関与しない)ひとは、おのれを制し、生の健やかさを求めて節制する。おいしいものを食べ過ぎて健康を損なうことがないようにと、節制は、食欲を抑制し節する。他方で、健やかであるには、必要な食物は、食べたくなくても、これを無理してでも摂取することが求められる。食の「養生」をいう場合は、一方で美味しいものの過食を節し、他方で、きらいなニンジンや納豆でも、必要ならこれの摂取をすすめる。だが、養生とちがひ、節制は、いやなものは視野にいれていない。節制は、少なめにと節することである。節制は、快楽享受を抑制することであって、不快なものを無理して食べることは関与しない。健康な食ということでは節制には不備があるというべきであろう。

古代から徳目として節制をいうが、食の快楽を充たして過食することができるようになったのは、庶民ではつい最近のことである。それまでの長い歴史においては節制など無用なものであったろう。あるいは、現代でも、食事を用意する者は栄養バランスを考えてするから、美味であっても多過ぎないように限定して出し、まずいものでも摂取すべきなら、これを添えてだす。美味の過食はかならずしも好きにできるわけではなく、そこで必要になるのは、節制であるよりは、むしろ、栄養を考えて出された苦手のニンジンや納豆を無理やり口

## 忍耐論

にいて我慢して食べることである。「節制しなくては！」ではなく、養生のため滋養のために「我慢、辛抱を！」という忍耐になる。

(性的節制は、夫婦の間では用がない)節制は、快楽の節制であり、生に必須の食欲と性欲の抑制を主とするものである(古代ギリシャのむかしから食欲と性欲のふたつに限定されてきた。これについては本誌『HABITUS』(2015年3月)の拙稿「節制という、なぜ「食欲と性欲」になるのか」を参照ください)。両欲求での過度を戒めて快楽享受をほどほどにする。だが、性の快楽の場合、それを楽しみとする夫婦の間では、快楽自体は抑制することはなく、毎夜でも存分にこれを享受したらいいのである。性的節制では、社会的健全さからの逸脱を戒め、これを厳禁とすることが中心になる。夫婦間では快楽の抑制つまり節制は無用で、夫婦間以外への逸脱は、節制ではなく禁止である。こう見る限りでは節制の出番はない。

古来、殺すな、盗むな、とならべて、「姦淫するな」は、どこでも戒とされた。これらは、ときに強い欲求となり、多くのものが人生に一度や二度は「くそっ、死ね！」等と妄想をいだいたことはあろう。だが、妄想はしても、夢と現実峻別し、自身の生きる社会の規範を理解し、法的抑制を厳守できるのがひとである。現実には殺人・強盗をするものは希で、姦淫も希である。そして、これらは節することでは済まない。いずれも、禁止である(殺人は、仇討ちなどではすすめられたし現代でも正当防衛では許容されるが、姦淫は常に禁止だった)。姦淫は、節制するものではなく、禁止・禁欲である。

長い歴史のなかで、性的節制では、売春とか一夫の多妻が言われえた。ほどほどにと。だが、これは、両性の尊厳をふまえる現代人においては、やはり禁止であって、節するものではない。異常性愛も、多くは禁止であって節制では済まない。マスコミは不倫をしばしば話題にするが、これも、もちろん、許されないもの・禁止をふまえての話である。性的快楽の抑制についても、食と同

様に、節制では、まとはずしてしまうように思われる(もっとも、大局的見地からは、性的節制は有効である。つまり、夫婦間では楽しみ、それ以外への逸脱を禁じるのであり、性欲の発現の場を制御・制限し、節しているのである。食でいえば、お膳やトレイに盛り切りにして「それ以外は駄目！」とするかたちでの節制である)。

(小学生には狭義の節制はあまり意味がない)「節制」は、道徳教育では、自分自身を律する徳目として挙げられる。だが、節制は、狭義には食欲と性欲を対象とし、後者は、未熟なこどもには言う必要がない。食欲の方は、旺盛だから節することがいるが、こどもの場合、食は主要には学校や親が用意するもので、美味で過食しそうなものは余分には出ない。つまり、快樂(美味)の食は節するまでもなく必要量しか摂取できない。逆に不味いものは、こどもは食べたくはないが、必要な栄養であれば、無理して涙を出しながらでも我慢して食べなくてはならない。教師や親は、そのとき、きれいなニンジン「節制しなさい」とはいわない。「いやでも我慢して食べなさい」ということであろう。節制は、きれいなものの摂取をすすめるわけではないから、ここでも拱手傍観である。

狭義の節制は、こどもにはあまり用がなさそうである。が、広義の節制、快樂全般についての節制は、現代では結構意味がある。最近では、さまざまな娯楽が開発され多様な快樂がある。パソコンゲームとか携帯電話での遊びなど、依存症になるぐらいだから、「夜更かしはいけない」などと節制をいう必要ができてきている。ただし、ここでも、節制では片手落ちになる。過度に遊びほうけていたら「節制しなくては！」という。が、快樂抑制の節制は、不快・苦痛のものごとをすすめるものではない。つまり、いやな勉強・宿題を節制はすすめることはない。これをすすめるのは、忍耐である。親は宿題について、「もう少し我慢しなさい、辛抱しなさい」と忍耐を説く。

## 2. 節制のそとに位置する(不快の)我慢や忍耐

こどもの場合、食物摂取を気ままにさせておくと、不味いものは食べない。したがって、必要な栄養物は不快でも我慢して食べるようにとしつけることがある。この、不快を甘受すべきことをいうのは、節制ではない。不快・苦痛に耐えよ、我慢、辛抱が大切だと、忍耐を説くことになる。

狭義の節制である食欲・性欲の快楽抑制では、ときに、空腹の苦痛に我慢し、出産となれば夫婦の性的営みを我慢する。快楽抑制の節制は、そういう点では不快・苦痛の忍耐もする。だが、それは快楽享受できないことの不快を忍耐するのみで、本質的に不快・苦痛であるものを忍耐するのではない。食欲自体をそぎ嘔吐するようなものを我慢して食べることは節制ではいわない。健康・養生のためには、嘔吐をもよおす嫌いな食べ物も食べなくてはならない。こういう食欲のわかない、本質的にうけつけがたい不快なものは、節制では、甘受せよとはすすめない。我慢し辛抱して食べるようにと、忍耐で説かれることになる。

(アリストテレスらは、節制に「抑制」「忍耐」をみた)アリストテレス『ニコマコス倫理学』は、節制は快楽への「抑制enkrateia」(1149a21)だと捉え、節制論と同等のページを費やして「抑制」「忍耐karteria」を取り上げている(cf.1145a15ff.)。節制の具体的な営為として、忍耐・抑制を論じるのである。「抑制」は、快楽欲求に挑戦してこれに打ち勝とうと「強力であるkrateō」(1150a35)ことで、能動的に活動的なものとして働く。「忍耐」は、不快・苦痛に負けないでこれを受動的状態に「持ちこたえるantechō」(1150a34)ものになると言われている。「抑制」するのは、動くものを動かないようにと抑えつけることであろう。快楽を求めて動く食欲を、それが動かないように、食を充足させないようにと、力づくで強引に抑えて制するのである。「忍耐」は、苦痛・不快を前に、これに逆らわないでその状態を甘受し、逃げ出したり助けを求めて騒

## 忍耐論

ぎ立てたりしたいのを、しないで、忍び耐えて、じっと持ちこたえることであろう(なお、トマス・アキナスの『ニコマコス倫理学注解』は、この辺りの注解では、*karteria*を、短期の*patientia*(我慢)などではなく長期の*perseverantia*(辛抱・忍耐)をもって捉えている(第7巻第1講)。*karteria*を本稿では「忍耐」と訳しておきたい)。

「抑制*enkrateia*」は、「無抑制*akrasia*」の反対で、この*akrasia* (だらしなさ)を否定しようと「強力である*krateō*」ことといったニュアンスのことばになるものようで、エンクラテイアといったら、即、節制のことになるのだとアリストテレスはいう(cf.1149a2ff.)。日本語では「抑制」といっても節制のそれになるとはいえず、むしろ「抑制」とか「自制」というと、怒りの方が先に想起されそうだが、端的なエンクラテイアは、快樂享受の抑制としての節制になるようである。これは彼だけの言葉使いなのではなく、古代ギリシャでは一般的な理解だったのだろうと思われる。クセノフォンの『ソクラテスの思い出』は、この「抑制*enkrateia*」と「無抑制*akrasia*」を対立させて扱い、「無抑制」は、快樂を、食やセックスや睡眠などの(つまりは節制の対象である)欲求の充足を求めて我慢できないものを指し、その反対の「抑制」は、これらを「忍耐する*kartereō*」もので、節制を内容としていて、エンクラテイア(抑制)の方が実際にはよりよくこれらの快樂を享受できるのだと論じている(cf. Xen. Mem. 4.5.9)。アリストテレスは、だから、怒りの抑制・無抑制をいう場合は、「抑制」だけではだめで、「怒りの」を明記した表現にならねばならないとも言っている(cf.1149a2ff.)。

この「抑制」や「忍耐」が節制の具体的な営みになるのだとすると、単に快樂のみでなく、節制でも、不快なものの「忍耐」とか、不快回避の「抑制」をも論じることになろう。もちろん、アリストテレスの節制論は、快樂の過度を防ぐ中庸を問題にしているものであり、不快を論じるものではない。が、その

## 忍耐論

節制での「抑制」自体を問題にする段では、「忍耐」も問題としていく。不快もここでは視界にはいつているといえよう。とくに「忍耐」の方は、快樂でなく、不快・苦痛の忍耐であり、食でいえば、嘔吐したくなるものを忍耐をもって甘受すること等となろう。

(抑制にも、我慢(忍耐)がいる)「抑制」は、単に理性的に抑制する場合、それで快樂を節しているとしても、感性的欲求が逆らい抵抗するのでなければ、これを意志の力で強引に抑えつける必要はない。猛毒が仕込まれたケーキだと知ったら、いくらケーキが好物で空腹であっても、これを食べようとする者はいないであろう。食べてはいけないという理性の抑制に従順になる。感性的欲求の方にとってもそれは、抑えられたのではなく、リード・誘導ということになる。抵抗ゼロであれば、力づくで強引に抑えつけることはなく、抑制は、抑えて制する抑制としては働いていないといえよう。

理性による抑制が名実とも抑制になるのは、感性の抵抗があって、理性にも感性にも不快・苦痛が生じてであろう。感性に不快を我慢させ、理性も、素直でない感性に四苦八苦して強引に抑えつけ力をいれて辛抱するものであろう。とすれば、快樂の抑制も、その抑制が苦痛になる段階において、我慢・忍耐となる段階で、実際的な抑制として働くのである。抑制も忍耐をたよりとするのである。

(楽しみの食や性に「忍耐」は、おかしかり)節制では、本来的な不快・苦痛の甘受は説かないから、不快を甘受する場面があれば、それは忍耐をもって補うことができる。また、快樂の抑制のもとでも厳しい場面には忍耐がいる。しかし、だからといって、節制に忍耐がとってかわるべきことにはならない。楽しい食事が忍耐で捉えられるのでは、人生はつまらないものになる。例外的にそういうひとはいる。食欲がない病人にとっては食も忍耐であろう。だが、普通には、ひとにとって食欲も性欲も、快樂を求めて動く根本の生理的欲求であり、

## 忍耐論

食と性は、人生の大きな楽しみである。それを忍耐でもって見るのでは食や性の基本を見失うことになろう。忍耐は、不快の忍耐であり、節制は、快樂の抑制である。食には、やはり後者がふさわしい。

こどもは勿論、大人でも食事の時間は、なんといっても楽しいものであり、快樂享受が過度になりがちの楽しみなのである。その度を過ぎすと節制がいわゆることになる。そこに苦痛に耐える忍耐などあまり用はない。我慢してというのは、嫌いなものが出たときぐらいである。その嫌いなものでも、空腹のとき、あるいは、飢餓のときには、おそらく、快樂をもたらすものであろう。

快樂を求めてひとも動物も動く。快樂享受は過度になりがちなので、ひとはその適正な抑制を己に課す。節制である。その抑制の極端は、不快で苦痛のこととなり、節制はその辛い抑制になると、我慢・忍耐をもってしなくてはならなくなる。忍耐は、ここでは、快樂享受が行き過ぎて節制すべき場面になっての極端の例外、ごく特殊なものにとどまる。

### 3. 忍耐は、徳目とはなりにくい

(忍耐は、すぐれた人間的営為だが···)「忍耐」に関する言葉は、しばしば格言となり、座右の銘となる。それは、節制の比ではなく、たくさんある。ひとを戒め励ます「忍耐」(あるいは我慢・辛抱)であるが、かならずしも倫理的に善とは見なされない。徳目の近くに置かれるとしても、一般的には忍耐を徳目とするには躊躇するところがある。なぜであろうか。

忍耐は、苦痛を甘受して忍び耐える。反自然的に苦痛を甘受するという、自然を超越した優れて人間的な営みである。だが、その高い能力をつかって、ときに犯罪のなされることがある。盗みに入るため、辛抱して高い木によじ登り、虫に刺されるのを我慢するというような忍耐がある。そういう辛抱・我慢ができない場合、盗みは頓挫する。忍耐があってはじめて盗みになりたつのであれ

## 忍耐論

ば、この忍耐は、犯罪に加担する悪と見なされねばならないであろう。

卓越した人間的営為であっても、それが目的とするものによって、その営為自体の価値は異なってくる。徳目という正義や節制があがるが、正義は、「正しさ」を目的とするものとして、悪人が実行してもその正義は、不正ではなく正しいことを求めるもので善になる。節制の場合も、その目的は生の健やかさであり、そのための手段として、手段の神聖化になる。性的節制では、とくに、不倫などへの逸脱の禁止をめざすのであるから、悪になりようがない。悪人が節制しても善となる。

(節制に比して忍耐は···)忍耐は、不快・苦痛を忍び耐える卓越した心構えである。が、これを手段としてめざすもの、目的は多様である。しばしば悪も目指される。邪悪な目的の手段となる忍耐は、邪悪産出に与したのものとして悪とみなされることになろう。

節制も、ときには邪悪な目的・動機に関わることがある。スリムになって盗みに入りやすくなりたいというようなことがありうる。だが、その場合でも節制は、盗み自体を直接の目的にはしない。節制自体の目的はそこでも身体のスリム化という健康なものであろう。あるいは、健やかな生を求める節制の精神は、盗みという不健全・強欲に迎合するようなこともないであろう。節制は、そこでも悪には直結しない。これに対して忍耐は、その直接の目的自体を悪としうる。大邸宅に盗みにはいるために筋力トレーニングの辛抱・忍耐をするだけでなく、実際に盗みに入る段階でも、盗みを成就するために、辛抱して高い塀をよじ登り、草むらで蚊にさされて痒いのを我慢・忍耐して隙をねらう。その場での忍耐がなくては、その盗みは成功しない。忍耐が、日常的にはより好ましい事柄を結果する頼もしい心構え・行為であっても、ときに悪用され悪をもたらす手段となるのであれば、無条件にこれを持ち上げるわけにはいかないのである。ひたすら善行となる正義や節制と同じ扱いはできないということにな

ろう。

(**勇氣は忍耐同様、悪に加担するが**…)勇氣は、徳目にあがるが、忍耐と同じく、悪行に直接発揮されることが結構ある。では、なぜ勇氣は徳目になり、忍耐はそうならないのであろうか。

勇氣は、悪人もしばしばもつ。海賊・山賊の首領は、類い希な勇氣なくしてはつとまらない。悪行は排撃・攻撃されるから、つねに危険がともない、それへの勇氣が求められる。勇氣は、危険と恐怖を前にして、逃げず恐怖を耐え忍び抑圧している。勇氣は、危険・恐怖を平然と受けとめるだけで、悪を実行することそのものではない(もちろん、その勇氣は悪行を目指し目的とするのではある)。その点で、悪人のものであっても、勇氣は、悪行からは一応切り離して見ることができる。極悪の盜賊であっても類い希な勇氣ある振る舞いに出れば「極悪人ながら、天晴れなやつ！」とその悪と区別して捉えることができる。勇氣自体は、凡人がしり込みするところで発揮される卓越したものとして、畏敬の念をもって見られ徳目にあがるのではないか。だが、忍耐は、通常だれにでもできることが多く、悪人の一般的な忍耐は(忍耐自体は、辛苦を甘受することだから、悪行自体とは区別されうるけれども)、悪に染めて見られるのであろう。泥棒するために高い塀を辛抱してのぼるとしても、それぐらいのことは、その気になれば誰にでもできることなのである。

弱肉強食を是とするひとのなかには、勇氣は、卓越した勇士・英雄のもので、忍耐は、弱虫・奴隷のもつものと感じることもあるかも知れない。脅されても、勇氣ある者は怯まず戦うが、勇氣のないものは、脅しに屈し小さくなってこれを我慢する。勇氣が勇士の高貴な道徳であるのに対して、忍耐は、劣等の弱者が敗北に抱くもの、あるいは戦う勇氣をもてず泣き寝入りしたり屈辱に我慢をつづけることで、こういう忍耐は、する本人にも情けないと感じられることである。それは、節制と忍耐のちがいとも重なる。節制は、富を過剰に有した裕

福な者がその快樂享受に過度になるので少し制限しようというもので、忍耐は、貧者が飢えや不味いものを我慢するものとなる。優勝劣敗・弱肉強食という強者の価値基準からすると、忍耐は、勇気や節制とは異なり、弱者の規範(極端をいえば「奴隷道徳」)にとどまるものと見られそうである(もっとも、真に勇気ある者は、危険・恐怖に誰よりも忍耐でき、攻撃でも暴勇にならず犬死を避け理性的制御下の忍耐を堅持して、忍耐力に優れている者でもある)。

### 4. 忍耐は、善悪の手前にある

忍耐は、徳目となる節制や正義とちがいで、ときに悪に加担する。善にも悪にも色づけできる。ということは、善悪に対しては、忍耐は、本来白紙状態で、それらの手前にあるものということであろう。

(感性的自然からの超越としての忍耐)ひとの善悪の手前にあるという場合、動物的レベルの話になることがある。動物のみならず、子供のすることでも、善悪の判断はないか未熟であり、善悪の手前にあって、善悪の責任は問えない。だが、忍耐は、このレベルの営みではない。動物的自然にしたがっているのではない。逆で、この自然に反逆したものである。忍耐は、自然的には排除したい不快・苦痛を、あえて甘受する。あるいは、尿意の我慢のように、充たしたい自然的な欲求を充たさず抑圧して、生じる辛苦に忍耐する。辛苦を引き受け、これを手段として、より価値ある目的を実現しようとする。善悪の手前にある忍耐であるが、ひとの忍耐は、自然的営為の苦痛回避や欲求充足を超えてこれを制御する卓越した人間的な営為になる。

(個我の自然も超越する忍耐)さらには、動物的自然を超越するのみか、人の精神的生活に固有の快不快についても、忍耐は、これを越える。精神的生でも、苦や快の感情は身体をもつ個我のもとにあって、この個我のための快(喜びや安心)を求め、不快(絶望など)を避けようとする。喜びなどの快は、些事であ

## 忍耐論

まり目的にはならないが(目的は価値物獲得であって喜びではないのが普通)、精神的な不快の悲嘆や絶望・不安などは、強烈な反目的として意識され、この不快の回避は強い欲求となる。辛苦を甘受する忍耐は、個我のもとに生じるこの不快・苦痛を、必要なところでは、回避せず受け入れて忍び耐えていく。あるいは個我の大きな欲求である希望や幸福さえも、崇高な目的のためにこれを抑え断念し忍耐することもある。

軟弱者や身勝手な者は、個我の恣をし快不快の自然に隷従したままで不快回避に走るが、忍耐する者は、快不快の支配から脱して自由になり、個我に生じる辛苦を甘受して耐える。忍耐は、動物的自然を超え、個我をよりよく制御する卓越した営為になる。ただし、個我のいだけ不安への忍耐が、例えば万引きに際してのことだとすると、不安を忍耐できるとは、万引きするということである。忍耐は、卓越したものではあるが、倫理的には、かならずしも善となるわけではない。

(原動機としての忍耐)ひとの営みを機械にたとえれば、忍耐は、原動機である。作業機は、善悪にわたる具体的な作業を実行する。正義を貫くために汗をながし、詐欺を成功させようと悪知恵をしぼる。忍耐は、こういう作業の手前にあって、そういう具体的な作業のための原動力・動力源となる。なにであれ作業を貫徹するためにと、我慢・辛抱をする意志の働きである。不快・苦痛という自然的には回避したいものを甘受して耐え、作業妨害の諸欲求を抑圧して辛抱し、作業遂行の道を整えるその原動力となるのが忍耐である。

忍耐は、善悪の作業を支える土台・裏方となり、作業達成への過程で生じる諸種の苦難から逃げないようにとこれを導き制御し続ける。感性的自然を超え、個我の自然(感情・欲求)をも超え、この超越を介して、より価値あると思うものを目指していく卓越した営為である。忍耐は、優れた身体能力・知的能力がそうであるように、善人が使えば、善を大きくし、悪人が使えば悪を大きくす

## 忍耐論

る。悪にも加担するもので、徳目には挙がらないけれども、人間的な高度の活動を可能にするものとして、高い価値をもつ。勇氣ほどの卓越したものではないにしても、忍耐力のあるひとは、快不快の自然を超越・制御した克己のひととして高く評価される。

(忍耐を尊重するストア学派や日本)なお、忍耐の評価は、一定ではなく、快樂や個我(の自然的欲求)を貴ぶところでは低く、逆の場合、つまりこれらの目立つことを嫌うところでは高くなる。禁欲主義のストア学派において、忍耐は、高く評価された。パトス(個我の快不快・欲求)を超克するアパテイアをモットーとしたストア学派では、本稿でアリストテレスに関わってあげたエンクラテイア(抑制)やカルテリア(忍耐)は、生き方の主軸をなす概念になっていったといわれている。

個我の等閑視ということでは、日本は、相当なものであろう。「出る釘は打たれる」で、個我が目立つことは嫌われ、個我には、全体(家族から国家まで)に合わせる事が強要され忍耐が求められた。我田への引水が全体(村落共同体)の用水配分に合わせることでやっと成り立つようなところでは、個我を抑制して全体にあわせることは不可避であった。そういう歴史に支えられてか、もっと根深い精神構造によるものかは不明だが、日本人の個我は、帰属の全体にまだまだ強く依存する傾向をもつ。したがってまた、個我(の恣・自然)を抑制して全体に合わせる忍耐は、大切な心構えとなって続いていることである。

### 5. 忍耐は、未熟者を変えていく

(忍耐は「辛苦の甘受」)忍耐とは何か。「忍耐は、不快な物事の引き受け、欲求の抑制等を行い、そこに生じる辛苦を甘受することであり、さらには、この辛苦をうちに忍んで逃げず騒がず、屈したり諦めたりせず耐え続けることである」とぐらいに答えられようか。忍耐は、(感性和個我の)快不快への隷属(自然的

## 忍耐論

対応)から自由になった卓越した営為である。いやなものをいやがらずに受け入れ、したいことをせず欲しいものを欲しがらず、そこに生じる辛苦を甘んじて引き受ける。かつ、この辛苦の甘受について、忍耐は、これから逃げたり逆らったり騒ぎ立てたりせず、途中で放棄したり諦めたりすることなく必要な限りその甘受の持続にと努める。

忍耐の要は、「辛苦の甘受」であろう。辛苦・苦痛は自然的には回避され排除されるが、忍耐は、そうせず、逆にこれを甘受するという反自然・超自然の対応にでる。苦痛は有害なものごとの発生を知らせるが、この苦痛を忍耐は、甘んじて受け入れるのである(苦痛は、狭義には感覚のものだが、ここでは広く心身の痛み・辛苦を表すものとして)。どんなにひどい傷でも苦痛がないのなら、忍耐することはない。苦痛・辛苦があって、これを甘受するのが忍耐である。甘受すべき苦痛がなくなれば、当然、忍耐も無用になる。

正座に慣れているものは、これを苦としないから、正座することに忍耐などいらぬ。だが、慣れていないものは、すぐに足がしびれて苦痛となるから、我慢することとなる。忍耐・我慢するのは、優れているからではなく、逆で、軟弱だからである。苦も忍耐も、未熟者のものでしかないともいえる。かつ、多くの場合、それに忍耐しておれば、正座の場合もそうであるが、やがて、それを苦とせず忍耐を無用とする強者にと生まれ変わりうるのもである。

(苦痛の甘受においては、自分を固持している)忍耐している者は、表向きは不快・苦痛に逆らうことなく穏やかにこれを受け入れている(騒いだり逆らうのなら忍耐していないのである)。が、外面とは裏腹に内面ではこれを排撃して大騒ぎし不快としているのであり、不快・苦痛と思う自分をゆずっていない。不快とする内面の自己を譲れば不快と思うこともなく忍耐無用となろうが、そうせず自分を固持している。忍耐では、我慢し辛抱している自分は犠牲に耐えているのであり、ほめられてしかるべきだ等と思い勝ちだが、かならずしもそ

## 忍耐論

うではない。自分を変えず譲らない強情者・エゴイストであるがゆえに忍耐していることもあるのである。

給食で、きれいなニンジンを我慢して食べる子は、我慢できない者とちがって、えらい。だが、もっとえらいのは、ニンジンのきれいなことを克服してこれを美味しく食べられるようにと、忍耐無用にと成長することである。ニンジンを無理して我慢して食べるのは、ほめられてよいことだけれども、まだ、ニンジン嫌いの自分を固持した未熟者にとどまっているのである。その未熟を成熟へと成長させるのは、その忍耐である。忍耐を通して、忍耐しなくてもいいようにと自分が成長させられるのである。

(忍耐は生の飛躍を可能とする)苦痛と忍耐は、未熟な者を変えていく力となりうる。苦痛から逃げるものは、いつまでも、それを苦痛とする自分に停滞する。だが、苦痛に耐えるものは、それが苦痛でない状態をもとめ、未熟状態を克服して成熟したものへと変っていくことができる。忍耐はひとを変革する。よく、「若いときの苦労は、買ってでもせよ」といい、苦労・忍耐を成長へのエネルギー・バネにすることがある。辛苦なり忍耐は、その状態からなんとか抜け出したいとひとを駆り立てる。未熟状態を自覚させその辛苦と忍耐をバネにして飛躍を可能としていく。

精神的社会的営為としての忍耐は、しばしば、そういう飛躍へと自己を駆り立てていくが、身体的な忍耐でもそれは同じである。過度の苦痛をもたらすものは身体に障害をもたらしかねないが、適度のそれは、それに持続して忍耐しておれば、筋肉を増強させたり免疫・抵抗力がついて忍耐力も大きくなり、より強い心身を作り上げる。

忍耐の種は、いたるところに見出されるが、それは、忍耐する者にプラスになるとは限らない。なかには、忍耐する当人にも周囲の者にも有害・無意味なものもある。歯痛は、放置しておくといつまでも痛むが、これは忍耐しても「骨

## 忍耐論

折り損のくたびれもうけ」になるだけである。忍耐は、すればいいというものではない。いじめに泣き寝入りし、鬱になり過労死するまで会社に尽くすような日本的な忍耐は、ほめられたものではない。無慈悲な経営者の貪欲の犠牲になると、尊い使命遂行に命をかけるのとでは、その忍耐の意義・価値はまるで異なる。しっかり考えてしなくては、忍耐は、苦痛、犠牲を、後悔を残すのみとなる。

勇気の体験は、ふつうの者には一生に何回かぐらいかも知れないが、忍耐は、トイレに行くのを我慢したというようなものまで数えると膨大な数になろう。日々は瑣末な忍耐に満ち満ちている。だが、人生にとって決定的となるような種類のものもある。いくら節制できても通常そのひとの人生に決定的とはならないが、ここというときの我慢・辛抱は、そのひとの人生を劇的に変えることができる。(どんぐりの背比べの)戦いでは、先に諦めたものが敗退し、忍耐に優れた方が勝利者になる。ナポレオンの格言といわれているものがある。それは、「勝利は、忍耐する方に、ありLa victoire appartient à persévérer.」というものである。おそらく、これは、多くの人の納得する人生の真実である。

# An Essay on Perseverance

## -Its Ethical Position-

Yoshiki KONDO

Emeritus professor, Hiroshima University

“Temperance” is defined as simply restraining pleasure. Unpleasantness or pain, which can control the natural emotional state, are not the objects of temperance. The supernatural restraint of enduring pain is achieved by “perseverance”. In Aristotle’s concrete analysis of temperance, he refers not only to restraint, but also to perseverance. Perseverance seems similar to virtue, but cannot be categorized as a virtue. Justice or temperance is always recognized as a virtue. For example, in the case of buying sex, if justice or temperance is executed by the person who intends to buy sex, he will be able to reject this unethical action. The character of perseverance is different; the person who intends to buy sex can bear any pains (headache or cold weather etc.) so that he can achieve his immoral goal. Therefore perseverance is not suitable to be categorized as a virtue. As a rule of nature, all animals including human beings want to avoid pain or unpleasantness. But, if necessary, human beings can confront pains with perseverance in order to endure them. With perseverance, humanity can achieve enormous success. Perseverance is regarded as ‘good’ when natural pain or pleasure can be controlled by perseverance to execute benign intentions. However, enduring some pains with perseverance to achieve malignant intentions is not regarded as good. Nevertheless, it remains the case that a good perseverance can be a decisive factor for the success of human life.